中世人の感性に触れる手引

――ジャック・リバール『中世の象徴と文学』――

松原秀一

おびただしい量の作品が邦訳されて来たフランス文学の分野でも、長く空白に近かったのが中世の部分であった。昭和三七年（一九六二）に筑摩書房刊世界文学全集第六五巻の『中世文学集Ⅰ』に採られたのは、『ロランの歌』（佐藤輝夫訳）、『狐物語』から「ルナールの冒険」（山田爵訳）「ルナールの裁判」（新倉俊一訳）の二技篇、『ピエール・パトラン先生』（渡辺一夫訳）、『結婚十五の歓び』（新倉俊一訳）、『ヴィヨン』（鈴木信太郎訳）、『サン・ヌーヴェル・ヌーヴェル』（鈴木・渡辺、神沢栄三訳）で、中世抒情詩も宮廷風ロマンスも聖者伝も欠けている。十年前の、故・神沢栄三、新倉俊一、天沢退二郎の三氏による四冊の『フランス中世文学集』（白水社刊）の刊行は一挙にこの欠落を埋めるものであった。それに続いて白水社から『狐物語』（鈴木覞・原野昇・福本直之訳）の大冊と、平凡社から『薔薇物語』（篠田勝英訳）の大冊が刊行され、二〇〇〇年九月には天沢退二郎氏による『ヴィヨン詩集成』も加わって、十一世紀から十五世紀に至るフランス文学を邦訳によっても概観できるようになった。未だ多くの武勲詩、ジャン・ルナール、ゴーティエ・ダラス、アドネ・ル・ロワの諸作やクリスティーヌ・ド・ピザン、ギヨーム・ド・マショーなど、邦訳の欲しいものも少なくないが、急速な充実振りと云えるだろう。

戦時中の昭和十七年（一九四二）に創元社は、フランスでその二十年前に刊行された大冊二巻のベディエ、アザール編『フランス文学史』の邦訳を出し始め、邦訳第三巻で原著第一巻の半ば、ラブレーの項まで達して中絶した。杉捷夫、有永弘人、佐藤輝夫、井上究一郎、渡辺一夫、市原豊太、川口篤、鈴木信太郎、辰野隆、丸山熊雄と竝ぶ訳者陣は壮観で、快挙と思わざるを得ない。フランス中世文

学研究について着実な基礎を与えた劃期的出版だが、白水社刊の四巻の『フランス中世文学集』もこれに匹敵すると云えよう。

作品の邦訳が揃い出したところで期待されるのが良い道案内である。もちろん作品があれば直接読めば良い訳だが、時代も遥かに離れ、文化も日本とは異質の国の文学である。いささかの親切な手引きは有用であっても邪魔にはならない。かつてのベディエ、アザールに代わってアルトオ社の分冊による仏文学史の邦訳が望まれるところである。近世については出来の良し悪しもあるかと見受けられるが、中世を扱う初めの二冊、特に初巻のジャン・パイヤンに依る中世の巻など推賞に値する刺激的文学史である。

フランス中世文学への接し方、扱い方については既にフランスでは標準的序説として推賞されている、ノルマリヤン中の俊秀イーヴ＝ピエール・バデルによる『フランス中世の文学生活』（原野昇訳、白水社刊）が邦訳されている。この書は入門書と云いながら、中世フランス文学を扱う場合に避けては通れない写本の校訂の問題までに触れた、行き届いた入門書で、内容の程度の高い好著である。中世の作品に重層的意味があることも同書で触れられているが、この優れた著作の邦訳の労を惜しまれなかった原野氏は、今回は中世文学に接する時に心すべき、意味の重層性を上手に実例で見せるジャック・リバール氏の邦訳で、我々を益してくれた訳である。

中世のフランス文学を再発見したのは十九世紀ロマン派の人たちであった。古典主義の軛から脱し、表現の自由を求めた人たちは、古典主義の文人たちがそれまで範としてきたギリシャ・ラテン文学を去って、求めるものを中世に発見したと信じたのであった。ユゴーもヴィニーもロラン、ロンスヴォーを歌い、シャトーブリアンは信仰純なる中世を夢みた。中世研究はお蔭を蒙って進んだが、研究が進むに連れて幻影も晴れて行った感がある。ベディエ、アザールの文学史で中世を主として担当したエドモン・ファラルの言説にそれは良く表われている。この文学史が戦前に邦訳刊行されたことは、我々をロマン主義的中世観から早く解き放ったと云えよう。

一例をフランス中世文学中の「白眉」と称される『聖アレクシス伝』に取ろう。神の召命を受けたアレクシスは、親の選んだ女性と結婚式を挙げた晩、妻に教えを説き、指輪などを託して、童貞のまま家を出て十七年を過ごし、子と知られることなく父の家に戻り、階段の裏に十七年を過ごし、神に召される。この貧者を実子、また夫と知った両親、妻の嘆きの中に、アレクシスは聖者としてあがめられる、というこの聖者伝は、中世を通じて語られ、ヴァルド派異端運動を起こしたりし、二十世紀まで作家にインスピレイションを与えてきた。しかも十六世紀にはイエズス会師によって日本にもたらされ、『聖アレシオの御作業』としてキリシタン版『サントスの御作業』の中に印行されている。水戸徳川文書の中にある三十葉程の写本にもこの伝記があり、潜行してきた宣教師が携行したものであろう。この聖者伝には迫害者も悪魔も現れず、超自然的奇跡も殆んど無い点でも特異なものであり、時代を下って行くと、奇跡が加

わって行ったり改変されていくのであるが、この聖者伝を早く日本で取り上げた姉崎正治博士が次のごとく記しているのには注目する必要がある。

博士は「又、アレイショの話しの如きは、捨世苦行の極端な例で、親に背き妻を棄てても、只乞食生活の間に祈念してゐるといふだけに留まる。されば此等の説話が、信者に対してどういふ感化を與えたかと云ふ事の外に、外間者、特に儒教者が之を見たならば、いかにも不合理なお伽話、又は倫常を無視する教だとの感を深くしたに違ひない。水戸藩の没収書中にアレイショ物語があるが、水戸の儒教者が之を見て何と考へたかといふことは想像に餘りある」と書いている。聖者伝中の「白眉」とするからには、この伝記をキリスト教史の中に正しく位置づけなくてはならない。

この「聖者伝」は東方教会起原であって、ある偶然から西ヨーロッパにもたらされ、ローマの聖者の物語とされたものである。日本人から見れば、家を出るなら結婚式の前夜の方が自然であろうし、わざわざ父の家に戻り、両親や妻を見ながら十七年も暮らすというのも不自然に思えよう。これを理解するには、東方教会での隠者の俗界の棄て方、「非情動性」impassibilité や結婚観を考慮に入れる必要がある。ここでは、妻は「棄てられた」のではなく、「秘跡による結婚によって信頼を託され」ているのである。両親、妻の嘆きは人間界の自然であり、聖アレクシスの「非情」は天界に属する聖者の「徳」と対比されている。中世フランスでもこの「東方性」が理解され難かったことは、十三世紀、十四世紀の改作に奇跡が加わり、妻との会話などが加わることにも現れている。この聖者伝を受けとめるには他の多くの聖者伝、十三世紀の「師父伝」*La Vie des Pères* やゴーティエ・ド・コワンシーの「聖母奇跡譚」などと対照的に理解しなければならない。

『ロランの歌』は国民的叙事詩として知られている。しかし二十世紀中葉まで、ロランが戦死することに誰も疑問を抱かなかった。この作では異教徒の多くは即死するが、ロラン、オリヴィエ、チュルパンなどの死は長々と語られるし、ロランは敵に打たれる度に、「身体には傷を受けなかった」旨が明記してある。ではロランは何故死んだのか。彼は角笛を渾身の力を込めて吹いたため、血を吐き、耳からも出血して死んだのであった。何故ロランが死なければならなかったのかには諸説が立てられ、聖ジルが勇者として作中に出てくることや、観戦者の立場に居たはずのゴーティエ・ド・ロムが戦死することなど、未だに諸説が立てられて解明を待っている。

以上の二例は中世の価値観を徐々に発見してきた例であるが、どちらも表層に現れた意味の段階である。ところが中世の学僧たちにとっては、作品には四層があるとされていたのである。

中世の神学者たちの共通の理解であった意味の四層とは、先ず「表層上の意味 Historia」であり、その下には「寓意 Allegoria」「教訓 Moralia」「予見 Anagogia または Tropologia」が隠されているとされたのであった。この観点から、キリスト教以前の古典作家

の作品にも神の啓示が隠されている筈であるとして、ラテン作家の作品も中世を通じて尊重され、書写され続けたのであった。

リバール氏の『中世の象徴と文学』は、主として「寓意」の読み取り方を、具体的な例で教えてくれるもので、読み過ごしがちな細部に隠された意味があることに気が付かせてくれる。中世の象徴については、エミール・マールがその『十三世紀の宗教芸術』で、十三世紀の百科事典、ヴァンサン・ド・ボーヴェの「スペクルム・マユス」に基づいて解明しているし、ブリュイヌの三巻の大著もある。リバール氏がこの二人の研究に言及していないのには奇異の感もあるが、数の象徴についてなど、エミール・マールの説明は分かりやすいし、説得的でもある。四については、アンリ・ド・リュバックの『中世解釈学』*Exégèse médiévale* の第一巻「聖書の四つの意味」に詳しく、四福音書に合わせてイエロニムス、アウグスティヌス、アンブロジウス、グレゴリウスの四博士を選んだり、ビードを入れる為に、アンブロジウスを落としたり、シトー派修道会では聖ベルナルドゥスを入れようと苦心したり、四福音書にならって、グレゴリウスにはマタイのように人間、アンブロジウスにはライオン（マルコ）、イエロニムスには牡牛（聖ルカ）、アウグスティヌスには鷲（ヨハネ）を当てたりしたことが語られている。中世には被造物の元素は火、空気、水、土の四元素であった。聖アレクシス伝に出てくる「十七」という素数にも意味がありそうであるが、まだ管見に触れたものはない。

リバール氏の著書は「数」「色」「動植物」「名前」「場所」「時間」、手袋とマント、衣服、武具、指輪から鏡と泉、媚薬、聖杯に至る「事物」を扱う各章に分けて、中世フランス文学に接する読者が先ず出会う『聖アレクシス伝』『ロランの歌』『聖ニコラ劇』『聖杯探索』、マリー・ド・フランスの『レエ（短詩）』、クレティアン・ド・トロワの『エレックとエニード』『イヴァン』と『ランスロ』『ペルスヴァル』などに例を取って、この象徴の問題を分かりやすく示してくれている。象徴の使い方には時代差があり、特にクレティアンの『ペルスヴァル』に発する聖杯もの以前と以後では扱いも違い、スコラ神学の浸透の強くなる十三世紀以後に顕著であると思われるが、リバール氏の引く例は普遍的な領域に留まると云えよう。訳文も正確で読みやすく、推賞に値する。

中世文学作品中の象徴の解釈は主観的なものになり易い危険な領域でもあり、リバール氏は慎重に歩を進めている。「聖杯」を巡る十三世紀以後の作品には確かに象徴が頻出し、一九六〇年代に、クレティアンの『ペルスヴァル』以後の聖杯文学の解釈について、異界、異教などの象徴を見い出す風潮が起きた。これに対してジャン・フラピエ氏が「ロマンス・フィロロジー」誌の二十四巻、第三号（一九七一年）に、「聖杯と様々なる火箭」«Graal et ses feux divergeants» という長大な警告的論文を寄せたことを思い出す。この論文は一九七七年に出た、氏の論集『グラールをめぐって』*Autour du Graal*（Droz刊、一九七七）に再録されている。フラピ

エ氏は当時、象徴、寓意的解釈を主張した数冊の研究書の批判をこの論文で行い、中世文学での象徴の使用は認めながらも、解釈への乱用を禁じ、テクストに密着して考えることを勧めている。フラピエ氏の弟子でもあったリバール氏は、この危険をよく知っての上での研究で、著書中に引かれた例は十分に説得的なものである。

過日、パリのノートルダム教会の前で日本人ガイドが、「入り口が三つあるのは三位一体を表しています」と説明していた。脇を通ってこれを耳にした筆者は、「ではブールジュの教会のポルタイユが五つあるのは?」と聞きたくなった。ミッテラン大統領が訪日した折に、日産の工場で二十八箇所を同時に自動溶接する装置を見せられショックを受けたと聞くが、そばにいた日本通と云われるフランス人が、「東洋には千手観音というものがあって」と発想の因は仏像だと説明したそうである。共にフラピエ氏のように、«peut-être oui, peut-être non» としか答えようがない。エミール・マールが図像学的象徴を解釈するときにヴァンサン・ド・ボーヴェに依ったように、推論には確実に頼れる根拠が必要とされる。多くの例が、確実に、前後関係の上に、慎重に推論しなければならない分野であるが、本書を読むことは中世人の感触に触れるよい手引きと云えよう。

＊＊＊

Jacques RIVARD, *Le Moyen âge : Littérature et symbolisme*, Editions Slatkine, Genève, 1984.

〈書評再録〉

田辺保編

『フランス　わが愛 ―フランス学への一つの試み』

編者は半世紀にわたって大阪外国語大学、岡山大、大阪市大などで教壇に立ち、多くの俊才を育てたフランス研究の重鎮。従来のフランス研究の枠を越えて幅広い学際的視野でフランスを捉え直し、「フランス学」として構築しようと編んだのが本書。同僚や教え子ら、編者を敬愛する研究者二十人が個性的なエッセイを寄せている。

中世の『ばら物語』からラシーヌ、ルソーを点綴し、フロベール、ボードレール、プルーストなどを切り込んだ「文学の変奏」を第一部とし、中世の風呂事情やカフェの発祥、伝統的なゾラとセザンヌの関係、さらにはギロチンとエッフェル塔の比較など多彩な「歴史と美の諸風景」、そして最後は編者自身の熱っぽい森有正論で締めくくる「フランスと日本」という、三部構成になっている。

古今東西の人士を魅惑し続けてきたフランスへの新たなオマージュであり、フランスを愛し、その「こころ」を知ろうとする者にとっては必読の書だ。　（「大阪新聞」H一二・六・二〇）